

# 地名についての研究 一枚方を中心にして

37期生

## I テーマ設定の理由

歴史と聞くと、普通どういうイメージを持っているだろうか。案外、大学の教授とか博士とかいう人が研究する、私達には縁のない世界という第一印象があるのでないだろうか。だが、私達はかなり身近な所に、私達の生活と関係の深い歴史を、見つけることができるはずだ。その例が地名である。私達が、日常で不思議にも思わず、使っている地名。その由来、または変遷の歴史は、その土地の歴史といってもよいぐらい興味深いものだ。その地名を、今回は枚方市を中心に調べてみようと思った。

## II 研究方法

### [1] 研究目的の決定

地名といつても地名の何を調べるのかはっきりさせておかなければならぬ。そこで、研究目標を三つ定めた。

- ① 地名の由来の種類には、どんなものがあるかを知る。
- ② 地名の文字を見ただけで、その由来がわかるような法則をみつける。
- ③ 地名の形成された年代をつかむ。

### [2] 研究方法とその進め方

1. 五十ばかりの由来のわかっている枚方市内の地名を集める。
  2. それを由来が似ているものどうしを集め、いくつかのグループに分ける。
  3. 各グループで、その中の地名に共通する特徴を見つけだす。
  4. 枚方以外の場所で、その特徴と同じことがいえるか調べる。
  5. 地名のできた時期をまとめる。
- } 法則を見つける。

#### (この研究での注意)

- 地名は広さに関係なく、土地につけられた名前であれば、地名として扱う。
- 川、野原、台地、山、池、湖、などにつけられた名前も、地名を反映してつけられた、または、地名と同じような由来でつけられたと見て、同じように扱う。
- 駅名も地名を反映したと見て、同じように扱う。

## III 研究結果

### [1] まず、研究材料として集めた地名をここに書いておく。（市内）

下島、上島、磯島、渚、郡津、北之口、南之口、西浦、東之口、鷹塚山、蹉跎、管相塚、楠葉、枚方、香里、枚方里、釈尊寺、田口、交野、継縄屋敷、天王、藤原、星田、天野ヶ原、星ヶ丘、星田山、南星台、中宮、茄子作、山之上、藤阪、三矢、禁野、伊加賀、岡、山田、

田宮、蔵の谷、泥町、津田、氷室、尊延寺、大垣内、堂垣内、垣内、九垣内、御殿山、三宝院、奥の坊、阿闍梨坊、天野川、小倉、出口、船橋、片鉢、—以上五十七個

〔2〕以上の地名を、由来の似たものどうして次のように種類分けした。

(A型)——昔の地形、または土地の状態から由来したもの。例えば、昔、山だったとか、沼だったなど。

(B型)——昔、そこにあった人工的なものから由来。例えば郡衙(郡司のいた所)があったとか、大きい屋敷があった、など。

(C型)——昔の、その地の自然状態から由来。例えば、昔、林だったとか、野原であったとか、杉の木が立っていた、葛が生えていた、など。

(D型)——昔の集落から由来したもの。例えば、その集落の特徴などを示していたりするもの。

(E型)——ある人物の残したもの、塚だとか、墓だとから由来するもの。

(F型)——ある人物の行動から由来。例えば、泣いたとか、狩をした、など。

(G型)——ある人物の名が、そのまま、または変形して地名になったもの。

(H型)——その地にあった寺の名が、そのまま地名になったもの。

(I型)——その村、または集落に課されていた、神役、役職などから由来。

(J型)——伝説から由來した地名。

以上十種に分類できた。

〔3〕各種の地名の文字上の分析と、特徴についての考察。

◎〔A型—昔の地形などから由来したもの〕上島、下島、磯島、渚  
例として磯島、渚、を分析してみた。

磯島は、昔、淀川の流れが今と少し違い、磯島あたりに流れていたのを示している。島というのは、川中島のことである。

渚というのも同じで、昔、淀川の渚が、そこにあったことを示している。

これでいえることは、A型では必ず一文字はその地の、土地の地形的な状態を示す文字  
(島、渚、山、潟、谷、など)を含んでいる  
ということである。

〈A型の特徴〉

ある地名で、その中に含まれる漢字の中に、一つでも土地の形、環境などを示す文字があると、このA型である可能性が高くなる。



磯島の所にある堤防から、今の淀川の流れを望む

◎〔B型—昔、その地にあった人工的なものから由來したもの〕

このB型は、範囲が広いのでさらに、三種に分けることにした。

(B<sub>1</sub>)郡津、香里

このB<sub>1</sub>というのは、律令体制下で、国、郡、里、と行政区分した時の、郡の郡司がいた所(郡衙)があつたことから由來している地名である。

この二つの地名に共通することは、郡(コウリ)という文字と発音である。郡津には郡衙の「郡」という字が残り、香里にはコウリという発音が残ったと思われる。

(B<sub>2</sub>)蔵の谷、小倉

これらの地名は、すべて仁徳朝期にできた、屯倉という倉があつたことを示す。

B<sub>2</sub>の特徴は、「藏」「倉」の二文字のどちらかが含まれていることである。

(B<sub>3</sub>)継縄屋敷、氷室、出口、舟橋

B<sub>3</sub>の地名は、それぞれの名が指す物が昔その地にあったことを示している。

これらの特徴は、物(屋敷など)の名が、直接、地名になっていることである。

《B型の特徴》

ある地名で、その中に「郡」という字か「コウリ」という音が含まれている場合は、昔その地に郡衙があつたとみて、差し支えないと思う。

そして、「藏」や「倉」の字がある時は、屯倉が置かれていた所の可能性が高い。

物の名前、物を表す名詞がそのまま地名になっている時は、昔、その地に、その名の示す物があつたと思ってよいだろう。

◎〔C型—昔の、その地の自然状態や植生から由來〕交野、禁野、泥町、藤阪、葛葉野  
交野、禁野、この二つをまず見てみよう。この二つの共通点としては、「野」という字を含んでいることで、昔、野原だったということを示している。このように、「原、野、林森」などの字で、その地が昔どういう自然状態だったかを示す地名もある。

また、藤阪、葛葉野などは、地名に植物名を含んでいる。これはその字で、昔の、その地の植生を示しているのである。

《C型の特徴》

野、原、泥、沢、森、などのような自然状態を示す字を含む地名は、その語で、昔のその場所の自然状態を表している場合が多い。また、藤、葛、杉、などの植物名がある地名は、その語の植物が、昔、そこに生えていたと思っていいだろう。

◎〔D型—昔の集落から由來〕大垣内、堂垣内、森垣内、丸垣内、垣の内

これは、すぐわかるように「垣内」という字が共通点である。この垣内というものを説明しておこう。まず、周りに垣がある私有地があった。それが、その私有地の中に、集落ができ、やがて、垣内という集落名ができたという。

《D型の特徴》

「垣内」という地名のつく所は、たいがいは、昔、周りを垣で囲んでいた私有地があつたと見てよいだろう。

◎〔E型—ある人物が残したものから由来〕 鷺塚山

資料が一つしかないので、まとめるることはできなかった。

◎〔F型—ある人物の行動から由来したもの〕 蹤蛇

蹊蛇。これは、足すりする、という意味である。(足摺岬のことを蹊蛇岬といつことがある。)この地名の由来は、昔、菅原道真が、太宰府に流された折に、彼の娘が父の後を追って、この地を通った。その時、悲しさのあまり足すりしたというのが由来らしい。つまり、その娘の行動が、地名になっているのである。

《F型の特徴》

つまり、動詞、またはその地名と「する」という言葉を合体させて動作を表すことのできる地名は、昔、そこで誰かがした行動が由来して、できた地名といっていいだろう。

◎〔G型—人物の名前に由来する地名〕 菅相塚、天王、藤原、伊加賀、津田、田口、これは例えば、天王なら、天皇がそこで狩をしたから、藤原なら、そこに藤原氏の別荘があったから、というように、人物の名が地名になってしまう種である。上の二つなどは、はっきりしているのだが、田口、山田などのように土着の豪族の名と同じ地名をしているものは、少しあやしい。人名が地名になったか、地名が人名になったかわからないからである。

《G型の特徴》

土着の豪族の名と同じ名が地名にあった時は少しあやしいが、天皇や高官が来たことがある地に、その人物と同じ地名があれば、それは、その人物から由来したとみていいだろう。

◎〔H型—その地にあった寺から由来〕 积尊寺、尊延寺、三宝院、奥の坊、阿闍利坊、これはすべて、その地名どおりの寺がそこにあったことを示している。



光善寺

◎〔I型—その村に課されていた神役、役職から由来する地名〕 中宮、片鉢、この二つの地名の共通点は何かというと「宮」「鉢」という字である。つまりどちらも神に祈る物(場所)ということで共通しているのだ。

《I型の特徴》

地名の中に「宮、社、鉢、杯」などの、宮または祭器を表す字があると、その地名の所は、昔、その近くの宮の神役をしていた、などということが多い。

◎〔J型—伝説からきた地名〕 星ヶ丘、天野ヶ原、星田、星田山、南星台

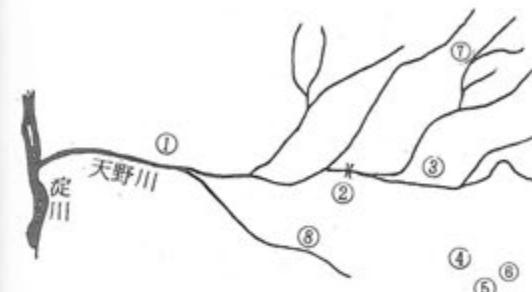
平安時代の貴族達は、よく枚方の天野川流域で、狩りを行った。その折、貴族達は、天野川を、天上の天の川になぞらえ、また、この付近にたくさん天体を模した地名を残した。

①星ヶ丘、③天野ヶ原、④星田、⑤星田山

⑥南星台

また、一つの伝説まである。中山觀音寺という所(⑧)に牛石という石があるが、これが牽牛星で、交野市の機物(はたもの)神社(⑦)の織姫と七夕の日に、天野川の逢合橋(②)で会うというのだそうだ。

これらは、皆、実在する。



天野川流域の天体地名

(4) 次に、以上A～J十種の特徴が、枚方以外でも通用するか調べた。

A型——磯上(いそのかみ・岸和田) 昔、そこまで海岸線があったといわれる。

B型——郡家(ぐんげ・高槻) 昔、国上郡の郡衙があったという。

藏之内(くらのうち・羽曳野) 昔、古市郡の屯倉があったという。

C型——葛原(くずはら・寝屋川) 昔、葛の原っぱだったことから由来。

D型——垣外町(かいと町・東住吉区) 昔、豪族の私有地だった。

垣外(かいと・八尾)

G型——太子町(たいし町・太子町) 聖德太子から由来。

H型——西大寺町(さいだいじ町・奈良市) 西大寺から由来。

法隆寺町(ほうりゅうじ町・斑鳩町) 法隆寺から由来。

I型——宮(みや・泉大津) 昔、宮があったという。

これは、すべて大阪府と奈良県の地名である。

また、H型では、駅名になっているのが非常に多い。(当麻寺、権原神宮前、吉野神宮前など)

(5) 地名の形成年代

時	大和	奈良	平安	鎌倉	室町
地	樟葉	郡津	天王	垣内	北之口
名	伊加賀	香里	禁野	大垣内	南之口
名	枚方	积尊寺	藤原		西浦
名	藏の谷	三宝院	星田		東之口
	小倉		嵯峨		

これを見てわかる事は、大和から平安までの時代と、鎌倉と室町の時代で、形成された地名に違いがあることである。大和～平安時代には、ABC E F G H I Jの種の地名がでているのに対し、鎌倉、室町時代にはDの種類、(集落から由来)の地名が多く形成されている。(北之

口などは、環濠集落（周りを濠で囲んだ集落）の出入り口だったことから由来）、その理由を考えてみると、中世になって、世の中が乱れだしたことから、村々が、それぞれ自治、自衛をしなければならなくなつたことに思い当たる。そして、自然と、集落が形成されていき、その名として、それまでと種類の違つた地名が生まれてきたのではないだろうか。

そのようにして集まつた家々は、集落として、一つの村を形成する。そして、そのまま江戸時代を通つて明治ごろまで、同じような形態のまま残つていくのである。



明治二十年代の、枚方の集落。ここでは、まだ地名ではなく、集落名といった感じだ。

#### IV 結論

- ① 地名の由来は、枚方市内だけで、A～Jの十種類が挙げられる。
- ② 各種の地名の特徴は、説明した通りである。また、そこで出した法則については、枚方市外の地域（大阪府と奈良県のみ）で、A、B、C、D、G、H、Iの型が通用できることが証明できた。
- ③ 地名の形成の年代については、大和～平安時代と、鎌倉～室町時代の二期に分けることができる。鎌倉、室町期の地名は、集落と関係があり、大和～平安期の地名は、その他の種類の形成のしかただった。

#### V 総括

##### 〔1〕研究についての反省

資料が少なかったので、はっきりしない点があった。例えば、市外の地名を、もっと集めていれば、E、F、Jの型も、証明できたかもしれない。

また、考察も誰でも考えつくようなことだが、これは資料を集め、分類し、考察して証明した上で結論なので、僕は、やはり自信をもってこの結論を発表することができる。その点では、研究は成功といっていいだろう。

##### 〔2〕研究を通じての感想

僕らは、よく無名の小山などに「牛腹山」などという“愛称”をつけたりすることがある。僕は、この研究をしている途中で、ふと、今の正式な地名も、初めは、昔の人達の、たんなる“愛称”だったのかもしれないと思い、地名の由来の底知れないおもしろさに、いよいよ驚きの念を大きくした。

#### VI 参考文献

- 「郷土枚方の歴史」 枚方市史編さん室  
「枚方市史」 枚方市  
「地名大事典」 竹内理三